

会 議 録

会議の名称		第6回つくば市不登校に関する児童生徒支援検討会議	
開催日時		令和4年(2022年)7月27日 開会14:00 閉会16:00	
開催場所		本庁舎2階 203会議室	
事務局(担当課)		教育局学び推進課	
出席者	委員	森田充教育長、柳瀬敬委員、倉田廣之委員、和泉なおこ委員、成島美穂委員	
	その他	こども教育宝仙大学 こども教育学部 教授 石川悦子氏	
	事務局	教育局 局長 吉沼正美、次長 飯泉法男、次長 久保田靖彦 学び推進課 課長 岡田太郎、参事兼教育相談センター長 久松和則、主任 淀純一郎、主任 巾崎一真	
公開・非公開の別		<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 非公開 <input type="checkbox"/> 一部公開	傍聴者数 3人
非公開の場合はその理由			
議題		不登校に関する児童生徒支援の検討	
会議録署名人		確定年月日	年 月 日
会議次第	今後の不登校に関する児童生徒支援のあり方の検討について ・不登校児童生徒に対する支援の現状と課題に関する議論		
○教育長 ただいまから、第6回つくば市不登校に関する児童生徒支援検討会議を開催いたします。本日は、こども教育宝仙大学こども教育学部教授の石川悦子先生			

をお招きして、不登校児童生徒に対する支援の現状と課題に関するお話をいただき、そのあと皆様で意見交換を行います。まず、学び推進課から石川先生のご紹介をお願いします。

○事務局

石川悦子先生は、現在、こども教育宝仙大学こども教育学部の教授として教鞭をとっており、また、同学部の部長というお立場でもいらっしゃいます。カウンセリング、教育臨床心理学がご専門で、子供理解と教育相談、子育て支援カウンセリング等の講座をご担当されております。文部科学省の不登校に関する調査研究協力者会議の委員も2015年から務められており、不登校についても豊富な見識をお持ちです。また、茨城県においても、県内の多くの学校関係者が参加する不登校対策連絡協議会において、ご講演いただきました。

主な著書としては、『教育分野で働く公認心理師の職責』、『学校・教育領域で働く心理職のスタンダード』等多数あり、執筆活動だけでなく、全国学校臨床心理士研修会や、日本心理臨床学会でご講演するなど、幅広くご活躍されております。さらに、日本公認心理師協会教育分野委員長、また、厚生労働省の公認心理師試験委員など、数多くの重責もお務めになっております。

本日は、国や県でお話いただいているような専門的なお話とともに、先生のご経験や不登校に対するご理解に関してお聞かせいただき、不登校児童生徒へのよりよい支援のヒントを得られたらと考えております。どうぞよろしくお願ひします。

○教育長

早速ですが、石川先生の方から、不登校児童生徒に対する支援の現状と課題に関しまして、御高話を頂戴したいと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。

○石川教授

今日はこのような席にお招きいただきまして、ありがとうございます。国の

不登校会議等に出ておりますので、そういったことでお声掛けいただいたと理解しております。私自身は大学で教師をしておりますが、この20年ぐらいスクールカウンセラーをやっております。現在も、小中高が併設されている割と大きめの学校で、11年ぐらいスクールカウンセラーをやっておりますので、そのようなところから日頃の子供たちの声とか、不登校の子供たちに色々お話をしたり、お母様方と話したりそういう中での実感を込めてお話をさせていただきたいと思います。

不登校が増えていることは皆さんご存知のことで、国の会議でも、8年前に増えた時にそれが発足して、色々なことを協議してきました。ただ、なかなか不登校の数自体は減らないということがありますので、そういった中で色々な地域での取組を共有しながら、少しでも良いアイデアがあったら各地域でやってみるということで、お互いに情報蓄積ができると良いのだろうというのが、いつも会議で話題になっておりました。

今日私がお話することは、それほど珍しい話は多分ないと思いますが、全体的に見渡してみたいと思ひまして、まとめて参りました。コロナのことで不登校と言いますか学校を欠席した子供たちが、全体で2万人ぐらいいるというお話は、文部科学省からも報告がありますが、この2020年の1月からちょうど卒業式ができないとか入学式ができないとか、そういうあたりからずっと私たちはこの2年と4か月ぐらい色々苦労しながらやってきたことを書いてみました。

マスク生活であり、黙食であり、私の行っている学校には小さな食堂があるんですけど、そこでもいつも副校長先生とか教務主任の先生が立って「とにかく黙って食べなさい。しゃべるんではない」と言っていて、毎日メガホンみたいなものでおっしゃっているのですが、その姿も結構辛いなと思います。

ようやく去年の秋ごろ減少して修学旅行ができるとか、今年の春もいい兆しだと思っておりましたけれども、今かなり増えていますよね。だから、林間学

校とか臨海学校とか皆さんおやりになっていますけど、その後また影響が出ているような学校も私の周りに結構ありまして、心配です。

こういったことがございますと、私も子供たちと話をしている、色々な意味で生活リズムが変わったのだと思うことがあります。例えば、慣れ親しんできた剣道場が閉鎖になったとか、慣れ親しんできたスポーツクラブが閉鎖になるとか、学校というだけではなく、その子供たちの生活にとって幼児期から大事なもののとか、人との繋がりとか、そういうのも変わってしまったりとか、他に幾らでも道場だってある、ということはあるかもしれないんですけど、なかなか子供たちの話を聞いていると、やっぱりそこに人の魅力があったり、それで通っていたのですぐに他を探していくってということではないんだとかですね。ですから、もちろん学校の中では色々な苦勞があって先生方や職員の皆さんで、子供たちを守りながら教育活動を続けているわけですけど、色々な意味で生活リズムの変化が、子供だけでなく大人も、そういう影響を受けていると思います。

休校、分散登校、学級閉鎖とか結構ありますので、それが長期化してくる中で生活リズムの変化とか気持ちの変化とか、色々な二次的な影響があるということは感じる場所です。ただ、これはもう全体で受けていることなので、誰かに特別に起きた状況ではないので、そういう意味では、みんなの気持ちは比較的一方向というところがあると思うんですけども、なかなか厳しい状況だと思っています。

それから、不登校ということですので、色々な子供たちと会ってきたと思うのですが、みんなよく「できれば普通に学校に通いたい」と言います。「普通って何？」って言うと「普通に朝起きて行って、授業とか受けて、それが普通にやることだ」と言うんですけど、でもやっぱりお腹が痛くなったり、頭が痛くなったりするから行けないんだということで、「体調さえ良ければ学校に行かれるのに、頭が痛くなるんだ」とよく言う生徒さんや児童さんがいます。こ

ういう中に起立性調節障害のような、朝元気が出ないとか、色々なところが痛いとか、そういう子たちも、コロナの影響もあって少し確率的に増えているということは医療関係者の方からもよく聞きます。

それから、「クラスが嫌なわけじゃない。嫌な人がいるわけでもない。でも自分の居場所はないんだ」ということを見ます。あと、学校に近づくと緊張する、黒い塊のように見える、落ち着かないとかです。中学に入ったら友達を作って部活も頑張ろうと思っていたけど、コロナで入学式もなくて、休校明けに部活に入ったけどうまくいかなかったということで、ペースが掴めずに、少し部活の原因のようにこの人は語るわけですが、やっぱり学校生活がうまくいかなくて休みがちになっている生徒もいます。

あとは、「ちょっと休んでいたら授業が進んでいた」、「宿題を全部終わらせるまでは学校に行けない、行っても仕方がないんだ」ということ。「学校からの電話には出たくない。何を話していいかわからないから」ということです。あと、「医者に行ったらすぐに良くなると思ったけど、そういうものじゃなかった」みたいなことを言う生徒さんは、小中高生になってきますけれども、「嫌だけど行ったらすぐに良くなるのかなと思って、待合室とかで期待していたんだけど、そういうものではないですね。もう行ってもしょうがないですね」みたいなことを言って、つまり、自分の状況が良くなったら、本当に普通に学校に行かれるのにと思っている、何とも切ない思いというか、気持ちこそそうなんだけど体がついていかないみたいな、そういうことを言う生徒たちがいます。

たまに大きくなった人と会うことがありますけど、不登校経験のある大学生は、確かにその生徒たちも大分休んでた時期があったり高校進学が心配だったりしましたが、「先生たちはどんな時もずっと心配してくれたね」と言って、今こうやって大学でやってますとか、そういうことを報告してくれる生徒がいますので、何と言うか、ロープの先に、こちらに大人や教師がいて、子供たち

はその先に行って、それは学校にまだたどり着いてないかもしれない、家に行ったりとか色々な場所にいるかもしれないんですけど、手放さないで何とかうまくそのロープをピンと張り過ぎても生徒も疲れちゃうでしょうから、少し余裕がありながら、でも繋がっているという感覚が必要だろうと思っています。

今日参加させていただくにあたって、こちら様の色々な取組を拝見して、学習支援の色々な協働実施をされていて本当に素晴らしいと思いました。何だかんだと言いましても、やはりこの学業の問題が子供たちに大きくありますし、ここに書いたように「ちょっと休んでいたら授業が進んでいって、もう授業を聞いていても前みたいな気持ちではもう聞くことができない」と言う子供たちがいますので、学業でどうやってペースを取り戻すかというのはすごく大きな、またきっかけになると思っています。ですので、後で民間事業者との連携とか、ある学校にはフリースクールみたいなものを置いたとか色々なことが、1回と2回の議事録を拝見しただけですけども、また教えていただきたいと思っています。

それから、私がスクールカウンセリングの中で感じるのは、例えば、傷つきたくないとか、対人関係に何となく不安があるという子供たちがいると思います。それから他者からの評価が気になる、分かって欲しいんだという気持ちですよね。それから、大きな集団や組織に帰属意識が持ちにくい、親和圏が狭い少数の閉じたグループの形成。親しくない人は関係ないみたいな、ぎゅっと凝集された親和圏みたいのがあって、そこではものすごくそこに気を使うんですよ、お互いに。そこから外れないようにすごく気を使うのですが、親しくなったり、あまり日頃付き合いがないと、そこは関係ないという感じで、その辺が割とはっきりしていると思う子もいます。

それから、仲間とは同じようなものを持ったりして、一体感を保とうとするのは思春期独特ですね。或いは共通の敵を持つことで結束を高めようとした、

この辺も思春期独特のものがありますね。あと、集団参加がうまくいかなければ1人の世界に閉じこもる、学級内の人間関係から距離を取るとかですね。あともう一つは、混沌とした気持ちを抱えているんですけど、それが行動にあらわれるのがあると思います。つまり、ストレスの行動がアクティグアウトなのですが、体で訴えるという感じで、例えば足が痛くなって歩けなくなったり、お腹が痛くなったり、気持ち悪くていつものどのあたりが詰まるような気がするとか、色々なことを言う方がいます。お医者様に行くとそれを身体症状と、昔の身体表現障害だと診断が下ることもありますけれども、こういう子供たちと接していると、だんだんに自分が抱えているストレスが分かってきて、その正体が親子関係であることも、勉強であることも、進路や進学であることもありますけど、だんだんそこに向き合えて、どこか体の調子が悪くなるとか、意識が倒れそうになるとか、そういうことが分かってくると、大分対処や行動が変わってくる場合があります。

私は心理学の世界ではそういうストレスを小分けにして、日常生活に適應できるような形で出すことをストレスコーピングと言ったりしますが、やっぱりこのストレスコーピングを子供たちに教えてやることはすごく大事だと思います。ですから、例えば、学級にいて気持ち悪くなっちゃう、のどのあたりが詰まりそうになって吐き気がして落ち着かないからトイレに行ったら、トイレに1、2時間いたとかそういう方もおられるわけですけど、そののところを、例えば、気持ち悪くなるんだったら、その人に合う整腸剤みたいのを飲むとか、ぎゅーって体に力を入れてまた弛緩するような方法を試してみるとか、自立訓練的なものが案外役に立つこともあるんですね。ただ、それを探し当てるには結構時間がかかるんですけども、それだけでもなく、色々な気持ちを、例えば「こういうことが嫌なんだ」とか「悩んでるんだ」とかはなかなか言えなくて、「自分は普通なんだ」とか「平気なんだ」とか「何も困っていることはないんだ」と言いながら、実は何か困ってることを抱えていて、それが行動つまり学

校に行かないとか登校渋るとか、そういうようなことになることもあると思います。

ですから、なかなか人に相談したり、自分のことと向き合ったりするのはすごく大変でエネルギーのいることですが、不登校支援にはやはりここところがとても大事だと思うんですね。ですから、きっと皆さんもどこもやってらっしゃると思うんですけど、その学習支援と同時に、このストレスコーピングが組み合わさっていくと良いだろうと思っています。ですから、後で、もしその辺の取組をどのようになさっているか教えていただきたいと思っています。

あと、この辺の数字はやはり右肩上がりになっておりますので、もう20万人近くなってるわけですね小中だけで。それから不登校の原因は国の問題行動調査ですと、第1位は無気力不安ということで、これは小学校も中学校も大体半数がそうになっているわけですが、無気力不安というのは余りにも大きい概念で、少し中身が分かりにくいので、後でご紹介する、子供に直接聞く調査を国の不登校会議ではやりました。ご存知かなと思ったんですけど、今日その結果を示したいと思います。

それから、皆さんのご議論の中でも30日以上休んでいる子が不登校と言うけれども、本当に90日以上休んでいる中で1日も登校しないのか、30日以上は休むけれども、30日から89日の間で、時々はもちろん来ているような児童生徒さんもおられるわけですから、そここのところの状態像とかアセスメントをしっかりしていかないと、不登校と言って一括りにはできないと思います。ただ、90日以上欠席した者は不登校児童の54.9と約55%を占めるということで、依然として長期に及ぶ不登校児童生徒さんが多いわけです。小学校のところと中学校とかちょっと赤くしましたのは、それほど有意差があるというわけでもないんですけどでも、小学生は比較的80から90のところ、まだ56%おられますね。だけれども中学になると、80から90のところは減ってきて、90日以上休んでい

るところの確率が上がってきます。だから、一旦小学校で不登校経験をすると、中学でも不登校とか少し長引くというのは、色々な調査でも出ているんですけども、そういう傾向が少しこの数字でも見られると思います。

ですから、小中の連携があると思いますが、やはり小学校で不登校の傾向が見られた方は、何で不登校になっていたかをよく小学校の方でもアセスメントをしていただいて、中学校に行く時にこういう配慮があると良いかもしれないとか、学業のところをつまずいたとか、そういった情報がうまく共有できて、できれば中1のクラス編制とか、早めの学習支援とかに繋がると良いのではないかと思いますし、他の調査でもそういう結果は出ているんです。なかなか難しいことですが、この調査ではこうなっている、この調査でもとっぴい持ってくると煩雑になると思ったので今日は持ってきてないんですけど、色々な調査を見ておりますとそういう結果、傾向はあります。

それから先ほど申し上げた、不登校に関する調査研究協力者会議ということで、この上の方はさっき申し上げたことで無気力不登校が多いと。それで、その児童生徒さん対象に、令和2年12月に小学校6年生、中学2年生に実態調査をしたんですね。ご存知かもしれませんが少しご説明させていただきますと、「最初に学校に行きづらいつ感じ始めたきっかけは何ですか」というのは、大体みんな25%ぐらいで複数回答なのですが、「先生のこと」、「身体の不調」、「生活リズムの乱れ」、「友達のこと」が上位でありました。上段の問題行動調査という学校対象の調査とは少し傾向が違うと思うんですね。もちろん設問の作り方とかそういうのによって調査に差は出ますけれども、こんな結果が出たと。そして、自由記述から、「先生の指導が怖かった」、「学校の先生に何々しなさいと言われるとプレッシャーに感じた」、「授業が分かりやすい学校であれば休まずに通った」、「勉強についていけない」、「発達障害や性の多様性に関する理解が足りない」などと書いた子供がいるということです。だから不登校の要因、背景、不登校である時期とその受けとめ方とか多様ですから、

支援のニーズも多岐にわたりますよね。だからこそ担任の先生が色々対応なさることが多いんですけれども、複数教員でチームになって協働したり、色々な先生たちが色々な場面で見立てていくとか、そういうことは大事だと思います。先生の指導が怖かったと言って、その子供の心が非常にその時弱くなっていて、何か色々なことがうまくいかなくて、普通の先生の言葉がとても強く感じたりとかそういうことだってあると思うんですよね。でも、例えばそう感じたときに、そう感じているんだということを誰か他の先生が聞き取ってくださるとか、そういう色々な可能性はあるのかなと思っております。

それから、学校を休んでいるときの気持ちですが、これは「ほっとした、楽な気持ちだった」これ70%近いですよ。「勉強の遅れに対する不安があった」これも7割近いですね。「進路進学に対する不安があった」これはやはり中学校が高いですね。それから「学校の同級生がどう思っているか不安だった」という、これも結構高いわけですよ。最初のきっかけとは別の学校で生きづらくなる理由とするのがあると答えた人のうち、30%40%は勉強が分からないというのが最も高い確率であったと。あと相談しやすい方法は二分するんですけれども、直接会って話すのが絶対良いと言っている子供と、メールやSNSが良いと言っている子供がいて、これは被らなかつたんですね。だから、割とどっちかに分かれるんだと思いました。

それから学校に戻りやすいと思う対応とすると、「特にない」が一番多くて、ちょっと残念なんですけれども、次に「友達からの声かけ」とか、「個別に勉強を教えてもらえること」も、1割以上はそういう答えがあったので、学習支援は一つのきっかけになりますし、学習支援という一つのツールとか場面を生かしながら、子供たちの心とか対人関係とか先ほどのストレスコーピングとかが少し成長したり、或いは自己理解が深まっていくと。こういうことは苦手だけど、こういうことは得意だとか、友達はいっぱいいないけれども、1人でもいればいいんだとかですね、少し考え方が広がっていったりすると良いと思い

ます。それは私の考えなんですけれども。

■のところは、文科省の見解ですが、多様な児童生徒への対応にあたっては、経験等により得られた特定の指導、支援方法が適切な場合もあれば、個々の児童生徒の状況によっては、適さない場合もあることを学校教職員は念頭に置くことが必要で、下は私の考えなんですけど、先生のこととか身体の不調等、児童生徒が抱える悩みや葛藤について丁寧に情報収集と分析を行って、家庭と連携を図りつつ対応する必要があるだろうと。また学習支援をどう進めるか各校に合った具体的な方法の検討が必要であろうというのが、私の私見ですし、それほど珍しい考えでもないですけども、そんなふうに考えております。

あとちょっとここは細かいんですが、この間6月に発表になったばかりの不登校に関する調査検討会議の報告書の骨子でございます。不登校支援の目的ですけども赤印のところなんですけど、不登校は取り巻く環境によってどの児童生徒にも起こり得ると。また、児童生徒の最善の利益を最優先に支援を行うことと、社会的自立を目指すこと、休養が必要な場合があることも考慮するということですね。ですから教育機会確保法ができて、不登校に対する考え方とか、世の中のとらえ方とかも少し変わってきたこともあるわけですね。つまり学校に戻るということを一義には思わないで、この子にとって今はとても休むことが重要な時期だとか、そしてそこをどう過ごすか、どういう豊かな時間を過ごすかということが非常に大事だという、そういう価値は広がったと思うんですね。だから、色々な意味で社会的自立を目指すということなんですけれども、そういう意味でも確保法以後の不登校の数が増えているというのは、考えの多様化が広がったというふうに言うことはできると思います。

ただし、どういうふうに成長過程の子供たちを支援していくかというところですね。そこが本当にそれぞれの自治体で色々なことを考えておられると思うんですね。GIGAスクール構想が前倒しで進みましたので、1人1台配られた端末を使って、遠隔の授業もできるわけですし、そこで健康チェックとか、そ

ここで少し相談みたいなこともできるのかもしれないですよ。でもそのところをどういうふうに具体的に進めるかというのは、結構工夫が必要だろうと思います。また真ん中の3のところの、児童生徒理解教育支援シート、これは結構前の第1期の会議の時に作ったものですが、これもウェブ上でご覧になれますからご覧になっていただきたいのです。

このシートの良いところは、それまでのどんなところに関わりがあったかという支援の経過がわかることや、親の考え、親の願い、子供の思いを書き込めるようになっていところが良いと思います。あと、例えばどういう病院にかかっているとか、どういう相談機関にかかったか、という記録が市全体で見られるという意味では、使っていただきたいなと思います。また、それが小学校から中学校に個別の指導計画、支援計画として繋がっていったらいいなと思っています。もちろん各学校で色々個別のシートを作るのはご苦労もあると思うんですけども、子供にとってうまくいったこととか効果があったこととか、逆にこういうことは苦手なのでこのところは配慮が必要だとか、そういうことが、有機的に繋がっていくといいなと思います。もちろん個人情報の問題もあるでしょうし、そこは相当配慮しながら、保護者の方のご理解とかご同意は必要だと思うんですけども、そんなことで幾つか柱が立っております。

6番目のフリースクール等民間団体の連携も柱に入っています。この会議が始まったとき、文科省の大臣が下村さんだったときに、下村さんも一生懸命フリースクールを見学されていて、そういったところとどのようにリンクしていくかというのが随分話題になっています。あと、オンラインカウンセリングも今よく言われるわけですが、どういうふうに進めていくかですね。

この不登校会議の中で、色々な事例とか取組が報告されるわけですけども、幾つかピックアップしてきました。京都市の取組で、クラスマネジメントシートを「クラマネ」と読んでいらして、市を挙げてやってらっしゃるんですけども、対象は小学4年生から6年生或いは中学生までで、学級担任等がクラス

や児童生徒の状況を的確に把握し、学級経営などに生かすための京都市独自のツールだということで、平成25年からやっているということです。

これに類するものとして、世の中にはQ-Uテストとか、昔だったらソシオメトリーとか色々なものがあるわけですがけれども、京都は京都でクラマネを使ってらっしゃるんですね。レーダーみたいになって見えやすいんですね。学級の認知尺度というのは学級の風土というか雰囲気、児童生徒が自分の学級をどのように感じているかを把握するための尺度で、もう一方では生活適応感尺度と言って児童生徒さんが、自分がどのくらい適応しているかということを感じる尺度なんですね。それを見える化によってデータが出てくるので、それを机の上に置いてスクールカウンセラーとかスクールソーシャルワーカーとの連携もできるし情報量も増えるということで、使ってらっしゃるということです。ですから、最近やはりそのQ-Uテストとかを、自治体を挙げてやってらっしゃるところもありますし、そういう取組も全国で色々あると思います。

あとは、さいたま市の未来教室で、ICTとかオンラインを活用した学習支援とか体験学習とかチャットで部活動などをやっているんだということで、そこでの活動を学習評価に反映しているという報告もございました。福岡市では無料の学習支援センターを4か所行って、高校のリスタート支援をしているようです。世田谷区では、北区では公設民営の教育支援センターをやっているという取組がありました。つくばの方でも民間との連携をなさってらっしゃるわけですね。

あとは、結構有名なので皆さんご存知なのだと思いますけれども、横浜市の中学校では学校の中にフリースクールを置いて、校長先生がリーダーシップをとって、専門的なアセスメントをして、①の真ん中の丸、とにかくカウンセラーとかみんなアセスメントをして、この子に何をすればいいのかを徹底的に考えるのと同時に、個人の支援だけじゃなくて②のところで、児童生徒の様々なニーズを満たす学級環境を作らなきゃ駄目なんだ、学級風土作りなんだとい

うことで色々やって、学校の中にフリースクールを作って、とにかく全教員が変わらなきゃ駄目なんだというのがこの学校のすごく力を入れたところのようですね。一部の先生がとか、不登校がいるクラスの先生が、じゃないんだと、とにかく全教員が代わる代わる、そして今日は誰が担当するのか、今日来ている生徒は誰なのかということ、校内の掲示板で分かりやすくして、普通にみんなが関わられるようにするんだということで、一方でまた生徒自ら計画と帰宅時間とかを決めさせて、生徒が自己管理できるということも大事なんだ、というようなことでおやりになったと。不登校が35人から4年目には18名に減ったという結果を出されているということで、一丸となってやると、効果が出ますというご報告なわけですね。

取組の例をもうお示ししてしまったわけですが、教育相談のレベルですので、色々な日常的なレベルがあって、少しこういう要配慮的なレベルがあってまた専門機関との連携があるようなレベルがあると思うんですね。やはり、早期対応だと思います。左の上に書かせていただいたんですが、私もスクールカウンセラーで学校に入らせていただくので、やっぱりこのままだときっと休み始めてしまう、もしかしたら、少し長くなるというような生徒さんとかもおられるわけですけど。何とか割と早い時期の対応で、生徒の物事の受け取り方とか、勉強ができない、難しいというところをちゃんと先生に言えるとか、そういうことの中で、早期対応ができるケースもあるだろうと思うんですね。ですので、下の方に吹き出しで書きましたけど教員の皆様の校内研修とか、或いは生徒たちのそういうストレスコーピング的なアンガーマネジメントとか、いじめ防止教育とかそういうのも大事でしょうし、それから、最近進んでいるのは、スクールカウンセラーの全員面接というのがありまして、結構やっている自治体も増えてらっしゃると思うんですけど、東京都全都でやっています。平成26年から。後でちょっとそのお話をさせていただこうと思います。

あとは、この間は別のところだったんですけど、不登校の対応を振り返って、

「スモールステップでやっていますか」とか、「本人が選択するようになって
いますか」ということですね。「こういう支援センターに行きたい」とか、
「こういう塾がいい」とか、本人のプライドを守っていかないと、なかなか難
しいですね。それから「次に繋がるような対応になっていますか」とか「教
職員がチームで対応していますか」というようなところもチェックしていただ
くといいと思います。基本はやはり、寄り添ったり共感的に考えることが重要
だと思いますし、大人が接する時には、言語表現のみでなく態度とか雰囲気と
か視線とか、こういうのももちろん大事だと思います。

それからアセスメントですが、もう皆さんやってらっしゃると思うんですけ
ど、本当にこの体の面と心の面と社会面学習面っていうのは、すごくアセスメ
ントしながらその生徒なり児童を立体的に見ていくことがすごく大事だと思っ
ています。例えば、起立性調節障害みたいのがあって朝元気が出なくて起きら
れなくて、遅刻気味になるんだとか、夕方になると元気があるんだとか、でも
朝は頭がぼーっとするので、学校に来てないから少し勉強が遅れてとか色々な
ことがあったとしますよね。でも、どちらかという症状だけ見ると、何とな
くこの頃学校に遅刻気味で元気がなくて、学業にもあまり取り組まないみたい
なそういうふうに見えるんですけど、でも、そこの背景に何があるかという
と、さっき言ったみたいに身体面で、すごく本人が苦勞してるってこともあります
し、そうやってこう見ていかないとその生徒の本当の苦勞だとか、葛藤が見え
ないと思います。最近例えば友達から、何となく外れて孤立しているみたいな、
そういう状態像だけ社会面で見ますと、この性格がこうだからみたいなことだ
けで見ると、全体が見えないことがあると思うんですね。だから、この三つ
の観点がすごく大事かなと思ってます。

そして、支援の目標はやはり自己理解と自分探しと社会的自立だと思うん
ですよね。ここにも書きましたけども、本当に子供自身の意向をよく確認しなが
ら、情報関連づけてどういうことが起きてるんだろうかということの仮説を立

てながらやっていくと、でもその仮説は周りが立てたもので、その子自身のこととは少し違うこともあるんですけども、支援するからにはこういうことが起きてるのではないか、そしてこれを目標にしていこうということが大事ですので、ゴールのイメージ、親御さんが思っているこうなって欲しいと思いと、子供がこうなりたいという思いと、また学校側からこうなったらいいのにとという思いは、それぞれ違ったりすることがありますので、そここのところのすり合わせも大事だと思っています。

一番下のところ、支援の目標は、自己理解、自分探し、社会的自立だと大きくは思っています。あとは、どの場面でもいいんです。学習支援の場面でもいいですし、学校の中でもいいですけども、聞く態度ということで、人の話を聞いて傾聴してもらうということは、誰にとってもほっとするっていうことありますよね。自分の気持ちを話すとか、自分が困ってることを話すとか、そうじゃなくて仕事上のことでちょっと相談するとか、色々な場面ってというのは、日々我々はそうなんですけども、話し手のニーズ、話し手の気持ちとすると、やはりきちんと話を受けとめて欲しいですし、話の内容だけでなく感情も理解して欲しいと、また一方的に非難されたり責められたくない、1人の個人的な人として丁寧に対応して欲しい、秘密は守って欲しい、裏表のない誠実な態度で接して欲しいという気持ちはあると思うんですね。特に、やっぱり子供たちなどは、この裏表のない誠実な態度で接して欲しいとかですね、それから一方的に非難されたり、責められたくないという気持ちは強いと思います。また保護者の皆様も、本当に1人の個別的な人として丁寧にして対応して欲しいという気持ちは、強く持ってらっしゃると思うんですね。

ですから、この三つの「きく」なんですけど、「ヒア」「リッスン」「アスク」と言ってもいいと思うんですけど、この最後のアスクですよね。上手く質問をしながら、話を整理して差し上げたり、アスク聞くってことはこちらが話を理解しようとしていないとなかなか良い質問が出てこないですもんね。だからあな

たが言おうとしていたことをこういうふうに理解したんだけど、これでいいかとか、今言いたかったことはこういうことかとか。或いはもう少し違う言葉で言うとういうふうに言えるのかとか、うまくアスクして、本人が本当に言いたかったことが言えるようなことは大事で、それは傾聴であり、寄り添いであると思っています。ですから信頼関係を、相手の話を聞き受けとめることから始まるというのと、これはもうカウンセリングの基本ですけど、肯定的な関心、重要ですよ。あと共感と、自己一致を裏表のない態度と、私の方で書き直してみましたが、大事じゃないかと思います。安定的な態度が大事だと思います。

よく精神科のお医者様がお話なさるのは、精神科というのは本当に、そこでぱっと手術するとか、そういう治療じゃないので、目に見えてこの傷が良くなるとかそういう治療じゃないんだけど、とにかく精神科の中で一番大事にしていることは、安定的な態度。医者の方が安定的な態度であなたの話をいつも聞く、それから、あなたの言葉を理解しようと思っているという安定的な態度が患者さんとの信頼関係で一番大事なんですとおっしゃる方が結構おられますので、やっぱりそうなんだなと思うことがあります。

あとは、今日のこの検討会議に合うのかどうかわからなかったんですけども、でも校内体制とか組織的対応がすごく大事と言われているので、これは校内でということになりますけれども、情報共有ができていくとか、担任の先生を支えるチーム体制ができていくとか、会議が報告だけで終わってしまう経験、傾向はないかとかですね。報連相が十分にできていくとか、過去の例えばいじめ防止対策とかそういうものが、児童生徒や保護者の皆さんにも伝わっているとか、こういうことが日頃大事ではないかと思っています。もし、そういうところが足りないという学校があるのならば、やはり情報共有する場とかそういうのを作る必要があるでしょうし、対策や対応について具体的に共有する場を作った方がいいと思うんですよ。

余談になるんですけども、いじめの第三者委員会なんかにかかわらせてい

ただきますと、「その情報は知っていました」とか、「確かにその保護者からそういう訴えは確かに個人面談時にあったかもしれません。でも大丈夫かなと思って様子を見ていました」とか、「特に管理職とかには報告しなくても大丈夫かと思ってやっていました」とか、そういうことが結果的に見えることがあるんですよね。その時はその時の判断できっと、子供たちの顔色を見ながら、クラスの様子を見ながら、そういう判断が、もしかしたら普通だったのかもしれないんですけれども、ただ、後から見るとやはり、保護者からそういう訴えがあったんだったら、その時点で少なくとも学校の中で共有したりどうするかということを考えている必要があったのではないかとか、そういうことは、よく第三者委員会なんかで、話題になることなんですね。なかなか忙しい学校の中で難しいことですが、そういうことを意識してやっていながら、ということが大事だなと感じます。

あとは、事例などにやる時には、さっきのアセスメントの話ですけど、情報収集しながら、チームでやるときにはまとめ役のコーディネーターの方を置いて、それは学年主任だったり副校長先生だったりするでしょうけども、担任を支えるチームづくりをしながら、なるべく早期に対応できるようにやっていくことかと思っています。あとはよくチームワークと言うわけですけども、チームワークでただ人が集まって何となく一緒にやっていたというのでは、情報共有していたというだけでは、チームワークにはなれませんから。一番下の議論の後に、ちゃんと方針が出ているかということですよ。話し合ったら話し合ったなりに、今回はどうしよう、いつまでにどうしようという結論が出ているとか、そのことをみんなが共有して、各人が主体的に積極的に参加しているか、そして自分は何をする人かということメンバーがそれぞれ自覚しているか。それが向かう方向性、ゴールは何かということ、自覚していることは大事だと思うんです。これは別に学校というだけじゃなくて、私なんかも日頃の大学の色々なこともそうですけど、何となく委員会を開いているとか言

うんじゃなくて、せつかく委員会を開いたのなら結論を出して、いつまでに何々をすると、できなければできないなりの振り返りをしようなんてことで、よく言ってますけども、大事なことかなと思います。

あとはPDCAサイクルということはよく言われるんですけども、もちろん生徒さんの、或いは学級のことをよく状態把握、実態把握をして、そして今何をしなきゃいけないかというニーズの明確化ですね。そして、当面この1学期はこうしようとか、9月までにこうしようとか、9月までには難しいけれども、年内にはこのようなことをやってみようとかということがあると思うんですね。例えば、不登校でなかなか会えない生徒ですけど、手紙とか、色々なツールで話してみようとか、夏休みに1回呼べたら会いたいとか、カウンセラーにつなげるならつなげる。或いは、そろそろ動けそうだからこの夏からは学習支援につなげられるだろうか、とかいろいろ目標は立てられると思うんですよ。PDCAだと思うんですけども。そこのところに、確かな行動連携が必要かなと思っています。あとは、先ほど言ったみたいにこのハイパーQ-Uという取組もありますので、これは市販されているものですけども、学級の満足度、学校生活の意欲尺度、それからソーシャルスキルも調べられるようになっていきますので、こういったものを使いながら少し客観的にクラスを見てみるとか、これは学校の先生のリーダーシップとかそういうのも見えるので、こういったものを少し客観指標として入れてみる。そして、今、このクラスでどうしても、上手く適応できてない、友達がいらない、何となく色々なことに不満を持っている子供たちが、やはりここにいるから、ここの子たちにどういう働きかけをしようとか、この子たちの困っていることは何かとか、そういうことを見ていくというときに、こういったものも役に立つと思います。

あとは、この全員面接というのはスクールカウンセラーがやるということで、東京の方で始めてみたんですね。でもいじめ対策があったんですけども今になってみますと、いじめ対応というだけではなくて本当に児童生徒との繋がりを

構築するとか、相談することへの抵抗感の軽減と相談しやすい環境の整備と、児童生徒理解及び実態把握というのに、目標が少し変わってきたんですね。実際には、スクールカウンセラーが大体早い時期に4月5月6月7月あたりに、先生方と打ち合わせをして、子供たちに事前のアンケートをとります。ちょっとしたチェックリストをやってもらって、これは後でカウンセラーと面接するときに使うから、ちょっと書いといていただけるとありがたいんだということで、学校で困っていることとか好きなこととか、ちゃんと眠れるとか、食欲があるとかそういったものなんですけど、書いてもらって、実際にグループか個別で面接をして、必要だなと思うことは先生方と情報共有するっていう辺りなんです。これは小中高全校でやっているんですが、そういう中でやはり数分間でもですね、個別に会うことで児童生徒の関わりのきっかけになったとか、やはり隠れていた相談ニーズを見つけたとか、こういったところですね、先生方との情報共有ができたとか、私もよく経験したらこの担任の先生に話して欲しいという声も結構あったんですね。「こういうあだ名で呼ばれて嫌だから言っというて欲しい」とか、「体のことでちょっといつもからかわれるんだけど嫌なんだ。でも、そういうことを言うと弱い子だとか、変な子だと思われると嫌だから、言いにくいんだけどでもやっぱり、体のことで言われると嫌なんだ」とか、「席替えたい」とか色々なことがありましたけど、こういうことだからかわれて嫌なんだとか、まずそういうのを結構聞くことはできたんですね。ですから一つの機会にはなるかなと思います。

いろいろ分析はしてみたんですが、大体1学年114人ぐらいまでは個別面接が可能だと思うんですが、1学年115を超えてくるとやっぱり、なかなか難しいので、グループ面接でやって、気になったお子さんは後で個別面接すると。因子分析等をしてみますと、スクールカウンセラーと協議会の連携強化という効果が出ましたし、一方で時間確保の困難とかそういう因子も出たので、時間はちょっとうまく工夫しないといけないなと思ったんですね。ただやっぱりいじ

め防止発見効果とか、そういう何か、生徒が抱えている悩みとかに触れる機会にはなると思いましたし、結果として相談も増加したという実感はございますので、相談が増えるのが良いか悪いかというのはありますけども、こういったふうにして何か起きてからではなくて、日頃からそういったものに触れてもらうというのも良いのではないかと考えています。

これは東京都がやったものなんですけど、この時の結果だけなのでそのあとずっと継続調査してれば、経年比較ができたんですが、この時、やったものなので、ご参考までですけども、初年度平成26年に全員面接やって、2年目が平成27年だったんですね。その初年度と2年目を比べると、全員面接により児童生徒から訴えが増えたということが、各校で報告されたので、何かしらの効果はあって、またこういうものが根づいていくと全学年面接することになりますので、いいかなというところです。

あとは、今不登校支援に必要な多元的な視点ということで、やっぱり真ん中の一番下の学校、家庭、友達だけじゃなくて地域、近所、それからエクソシステムとして親の職場とか、親の友人とか、その子自体の兄弟の学校とかですね、そのくらい色々なものを含みながら、そしてその周りにはもちろんマクロシステムといって、社会とか国家とか社会通念とか、コロナみたいなものもありますので、そのくらい大きなシステムの中で、多元的にとらえていかないと、不登校がなかなか理解できなかったり、色々な兆しが見えたとしても、また同じような状態になることもあるということで、少しマクロ的な視点というの也需要かと思っています。

これは不定愁訴があって、登校渋りが見られる中学生A。コロナ禍により、両親が在宅のリモートワークに変わり、父親がAの家庭学習を事細かに管理するようになった。親との関係も悪化し体調もすぐれず不登校状態が続くようになった本人を取り巻く家庭や学校だけでなく、エクソシステム、マクロシステムの影響を視野に入れた支援を心がける必要があるということで、私もこういう時

に親御さんに会うんですけど、親御さんも結構たくさんストレスを抱えていたり、不安を抱えていたり、先行きの見えない何とも言えない混沌とした気持ちをお抱えになってたりとか、そういうことがありますので、それがどうしても子供に言ってしまうということもあるんですよ。「自分の不安を確かに子供に言ってたかもしれない」とか、「今勉強しなかったらこうなるかもしれない」とか、そういうふうに行って「自分の気持ちを子供に、確かに押し付けてたかもしれない」みたいなことをおっしゃる方もいますので、「お父様、そうだとしたら今日から自覚して、明日からそこ変わってください」とか、そういうことということあるんですけど、そういうようなことで不登校とか児童虐待とかヤングケアラー、貧困とか、こういったものもですね、少し社会との繋がりの中で考えていく必要があるということです。

あとはやはり、早期対応が必要だということ、不登校には本当に不安が強いタイプとか、生活リズムが乱れたり、遊び・非行タイプとか、幼い面があって無気力に一見見えるタイプですよ、あとは発達障害があって何となくやっぱり集団の中でうまくいかない、色々なことが気になって疲れてしまうとか、そういうタイプもあられると思います。

保護者対応のポイントですが、やはり連携が難しい親御さんほど、実はご自身が困っておられるというふうに思います。なかなか連絡がつかない方とか、せっかく面談を設定したんだけど、直前でキャンセルなさる方とか、色々な方がおられるわけですが、同じ兄弟でも保護者の方も少し態度が違うこともあられるんですよ。そういうのをよく聞いていくと、なかなか今うまくいってない子供のことで、どうしていいかわからないし、長引いているからあんまり話してもしょうがないんじゃないとか、色々な気持ちになるんだ、なんてことをおっしゃったりします。あと、あんまり学校に良いイメージ持ってないんです、みたいなことをおっしゃる方もいるわけですよ。だから本当に保護者様の不安とか孤独とか自信のなさを受けとめながら、一緒に考えていきま

しょう、どういうことができるか一緒にやっていきませんかという、取組が大事でしょうし、学校への具体的な協力をお願いして、例えば、学校行事とかはやっぱりしててくださった方がいいですよってということで、どういう形で保護者の方に渡すか。その時、2週間に1回お会いしましょうとか、何かそういう形もいいでしょうし、ということで親の気持ちが子供の気持ちに対して押し付けたりしないように、そういうふうにはなってないと思いますけれども、ということで確認したりするというのも、一つの介入になるかなと思っています。

あとは、本人への対応ですけども、やっぱり人生の中で子供にとって必要な自分崩しと自分育てに苦しみながら取り組んでいるととらえて、責めたり叱ったりはしない関係づくりですよ。将来の社会復帰、自律、自立、自分探しを応援すると。その全体像をアセスメントしながら学校生活とか、学校復帰だけが目標じゃないですけども、社会参加の手がかりを提供したりとかですね。あと電話や面談では体の具合とか、どんなふうに過ごしてるかとか、どんなことに興味があるかというそういうさりげない会話が大事だと思いますし、家庭訪問もすごく大事なんですが、あんまり侵襲的になっても、子供もちょっとこういう場所がなくなっちゃいけないので、ちょっと近くに行ったら電話を入れて、「近くまで来たんだけどちょっと玄関先に寄ってもいいか」とか、了解を得た方がいいのかなと思います。ちょっとお手紙を入れてくるっていうのだったらそのままでいいかもしれませんけどね。あとは本人の希望があれば級友を迎えに行かせたり、時期を見て教育支援センターとかそういう支援のところにつなげていく。いきなり繋がらなくてもまずはこういうところがあるとか1回見てみないかとか、そういうことが大事ですし、他機関に繋がった後も子供さんや保護者とのきずなは学校が断たないようにしていくことですよ。

これは不登校に限ったことじゃないんですが、もうスライド後2枚ぐらいで終わりますが、やっぱり予防っていうのが日頃からあって、そしてそのために、

今クラスがどうなってるかとか、学校づくりはどうなってるかっていうような予防的なことがあってそして、準備と言って校内体制とか校内の委員会体制とか、例えば日頃の取り組む人全員面接みたいのがあるとか、Q-Uとかやるのであればやるとか、校内分掌が決まっているとかそういうことがあると思うんですね。何か本当に問題が発生して不登校が起きたんだとか不登校渋りが少し顕著になってきたと言ったら、児童生徒のアセスメントとか保護者との連携、教職員のチーム連携だと思うんですけど、この予防とか準備をどういうふうに日頃から進めていって、また、そののところでうまくリンクしていくかが大事だと思います。また、不登校なり、いじめ問題なり、色々な問題が少し落ち着いてきたときには、フォローアップと言って、システムづくりとかそういうのが必要だと思うんですが、今、こういう表を作り始めたりしています。

あとは心の居場所のある学校があって、子供相互の人間関係があって、児童生徒理解に基づく支援があって、そして教師と子供との信頼関係があって、というところですよ。そういう中で自己理解をしたり自己成長したり社会参加したり、学校にいる間にはすべて解決できないこともあると思うんですけど、また、例えば中学校に行つてとか高校に行つて、もう1回やり直してみようとか色々な意味で、もう1回、自分の中でリスタートしてみようという生徒たちがたくさんいますので、そういうことかなと思います。誰かとの信頼関係を結びつくといけるとか、やっぱり何かあったら、あの人には言ってもいいんだとかですね。何かあの人に話したら、それなりに、ちょっとしたアドバイスがもらえる、アドバイスはもらえなくてもいいけど、ひたすら話は聞いてくれるんだとかですね、そういう信頼関係ができるといいなと思っています。

VUCA時代なんて言って、先行きが不透明で将来の予測が困難な時代と言われるわけですがけれども、PDCAサイクルじゃなくて、OODAなんだなんてことも最近言われたりしますけども、そういう意味で情報を収集したり、状況を判断したり、そして意思決定をしてそれを実行していくと、うまくいかなければもう1

回見直して、色々なことをもう1回アセスメントし直すということは大事だと思っています。事前にちょうだいした資料等を拝見させていただいて、本当にこちらの地域で、学習支援の事業もいろいろ展開して複数の機関を開設されていて、また民間団体との連携もなされているんだと思って、すごいなと思いました。またアンケートはどういう結果が出るのかということで、結果の活用方針はどんなふうに行われているのかなとかですね、そういう中で学習支援というのも、場所によって、スタッフによって、色々なお取組があって、こういう取組がよかったとか、ここはちょっと見直した方がいいとかってことももしかしたらあるのかもしれないので、そういうスタッフの研修とか、どんななさってらっしゃるのかなとかですね。あとは各施設の活動状況と、アンケート結果とクロス集計のようなものもなさるのかなとかそんなことがちょっと関心がありました。あとは、さっきから申し上げたような学習支援というものと、学習支援を通して子供の心やその対人関係力とか、物事の見方とか、そういうものを醸成していくようなことの組み合わせなどもなさってらっしゃるといいなと思ったところです。

あとは、これはもう今までも随分話題に出てらっしゃると思うんですけども、支援に繋がっている生徒さんたちと、もし繋がってない生徒さんたちがいるとするならば、そのあたりの状況分析というものは、どんなふうになさっているのかななんて思った次第です。ただもう今日6回って聞いたので、私は1回目と2回目の資料しか拝見してございませんのでですね、随分またその先進んでらっしゃるんだろうなと思ったんですが、せっかく資料をいただいたので、1枚だけ感想を書かせていただきました。以上です。ありがとうございます。

○教育長

石川先生本当に貴重な資料等も含めて、ありがとうございました。委員、何か最後にお聞きしたいと大丈夫ですか。

○委員

やっぱり難しい問題だと感じていて、つくば市の特徴として広いということと、地域ごとに事情が違ったり、生徒数が増えてきて先生の数と準備が追いつかない中、今、後追いのように必死にやっているの、よその充実した取組を聞くと、まだまだやっていかなければいけないことがあると感じる次第です。

○教育長

今の先生のお話伺って、聞いてみたいことがありましたらお願いします。

○委員

一番気になるところからお聞きしたいんですけど、今、学習支援を通して子供たちの内面の問題を探っていく、ということでしたが、先生のおっしゃられる学習支援というのは、教室で勉強する、或いは学習指導をしている中で子供の問題を発見しようとしているということですが、そのカウンセリングとの関わり、別にカウンセリングは入るけど、基本的には子供が学習支援するもんだという前提でということですか。

○石川教授

学習支援事業というのは結局、学校とは違う別施設でやってらっしゃるんですよね。そのことを言いたかったのです。学習支援を受けるために子供さんたち通ってきてらっしゃるわけですよね。不登校という一つの背景を持ち、だからそのところでぜひ学習支援を受けるために来てらっしゃるんだっただらば、そのところでなさってらっしゃるでしょうけど、こういうソーシャルスキルのことも力をつけていかれると良いということで、それをどんなふうになさってらっしゃるかなということなんです。

○委員

もうちょっと前のところで、子供たちは学習が遅れていくこととか、学校で勉強がわからないということをしごく負担に思っているというか、周りからも色々なプレッシャーもあってそういうことも考えていると思う、ということをやったり、学習の遅れを取り戻すとか、勉強から入った方が良く考えている

のかなと思ったんだけど、別にその学習支援を通さないで、子供の心の問題っていうのも、もちろんあるっていう。

○石川教授

でも、子供たちがそういう施設に通うには、目的がはっきりしていた方がいいですよ。苦手な勉強を教えてもらえると、例えば今日はここのページをやるんだとか、そういうふうにはっきりしていた方が良いと思いますので、学習支援という目的とやり方はすごく良いと思います。ただ、それを通しながら、例えば、今まで分からなくても質問ができなかったとか、質問ができないとしたらどういう言葉で質問していいか分からないから質問ができない子もいるし、何を質問したらいいか分からないから質問しない子もいるし、色々なタイプがいると思うので、ひもときながら、自分が困ったときにはこうやって人に聞けば良いんだよとか、先生に質問しに行くときには「先生ちょっと今お時間いいですか」とか言って質問するだとか、そういうソーシャルスキルを身につけていくと、また学校に戻った時に良いだろうなと思うものですから、そういうことを含めた、学習支援を通じたSSTとイメージしております。

○委員

もうちょっと立ち入っちゃうと、そういうのに疲れてしまう子供がたくさんいるわけじゃないですか。「本当はいいんだよ、勉強が遅れたって」、「あなたはあなたでいいんだよ」、「もう勉強は好きなことやっていけばいいんだよ」と言ってあげることで学習というプレッシャーから解放される子もいるし、それどころじゃなくて、「今は休んだ方がいいんだよ」と言ってあげなければいけないような子もいると思うんですよ。だからプロセスによって、その子の状態によって随分違うので、だから、私も国が教育支援センターとか、学習支援ということを頭に置くっていうのは、例えばそうであるけれども、実際には、むしろそれから、フリーであった方がいいなんて思うんですけど、カウンセリングの立場からどうでしょうか。

○石川教授

基本そうだと思います。昔は適応指導教室と言ったわけですけど、教育支援センターという名前に変わって、あそこに通っている時も、何が何でも1時間目なり2時間目なり3時間目じゃなくて今日はもう卓球やっていたいとか、今日は、体育館があるところでスポーツをやっていたとか、色々選べるわけですよ。だから、自分で選んで今日はこうしたいと。そうやって選んだり、決めたり、そしてこういうことやりたいですと。今日は、算数なんか全然やりたくないです、というのもすごく大事だと思いますので、そういう意味でそういうところがあると思うんですね。ただ、例えばそういうところのやりとりをしているときに、なかなかそういう意思表示も難しいお子さんもいらっしゃるかもしれないので、やりたくないんだったらやりたくないって今日はもう、今週はずっと卓球やっていたいですって、言っているんだよみたいな、本当にそういう、そういうのを含めてのソーシャルスキルというふうに思っています。

○委員

スクリーニングなんですけど、考え方によっては、というんですか、子供の心を一つのブラックボックスと考えると、色々なことがあるけど、その子供の心にどんどん立ち行っていくわけですよ。スクリーニングという発想が国の方からも出ているみたいですけど、自己管理していきなさいということで、十分子供の心にどんどん立ち入っていて、それが当たり前みたいになってくると、スクリーニングの意味がちょっと違ってくるような気がしていて、全員カウンセラーにというのは分かるんですけど、それは何か問題行動を発見するためのスクリーニングと考えると、子供たちはやっぱり、自分の心を大事にしたいということからすると、案外、大事な問題は言わなかったりとかですね。スクリーニングできると考えるのはちょっと、文科省も慎重に考えてもいいかなと思ったんですけど、どうでしょうか。

○石川教授

スクリーニングって確かにそこで全員面接もですね、全員会わなければいけないとかあって、しゃべらなければいけないとなると、すごくやっぱり嫌ですし、また、子供に負担も与えると思うんですね。だから、実際にはここで繋がりとか抵抗感の軽減とか、実態理解って言うんですけど、実際しゃべりたくななくてもいいですよとか、今日別にしゃべることないですからみたいな生徒さんだっているわけですから、それはそれでいいわけですよ。今日あなたのために十分とったんだから、何が何でもこれとこれとこれは聞きたいですなんて、そんな面接はする必要はないわけですね。だから、日常会話をして、そんなに課外で例えばサッカーでクラブチームに入っているとか、そういう普通の話をして、へえそんなこと頑張ってるんだとか、そういうのってなかなか話してみないと、分からなかったから、今日、会えてうれしかったみたいな感じで、結構全員面接は実は終わっていくんですね。だから、そういうふうにしても、どうしても拒否する人でしたら、もちろん成立しなくてもいいというたてつけでやっているんですね。そうなんですけども、だからこの子には問題があるかといつて全部チェックリストでつけてるとかそういうことではないんですけど、何か困ったときにはもしかしたらあの人に話してもいいかもしれないとか、あの人だったら自分の話を聞くかもしれないとか、そういう一つの、きっかけを作っておくというようなところで児童生徒の繋がり構築っていうのが1番目に来てるんですね。だから、確かに、本当に成長過程の思春期の子供さんたちなので、こちらが押し付けたり、そういうことに対して非常に抵抗を示すことはあると思いますので、そこはやっぱりうまくやっていかないとこういうものも逆効果になったりとか、その時間だけは休むとかですね、そんなふうになるといけませんので本当にその辺は選択の自由があるということで、アンケートを事前に取り上げて申しあげましたけど、これだって全部はいはいはいはいって、何かをいかにもつけたんだな、というような時はそうだったんだなと思って、そうやってこちらも受けとめて、ちゃんともっと正直につけてくださいなんて

いうことは絶対申しませんし、そういう共通理解でやっているんですね。なかなかその辺が、どういうのがいいのかなと思ってたら、本当にごく自然な教育活動の中で、黙ってる子は黙ってる、言いたい人は言うみたいな、そういうのもいいんだと思うんですけども、子供たちの中にはやっぱり、なかなかこういうあだ名で言われたら嫌だなと思ってるけどでもやっぱり嫌だなっていうことを言うことさえも何か自分が、何かちょっと特別みたいで、でもずっと嫌だなと思っていたとかということもあるので、何かのきっかけになればいいかなというような感じですね。

でも、そういうのを聞かせてくれても必ず確認します。「学校の先生に言ってって今言ってくれたけど、でも本当に言ってもいい？」って言って、担任の先生が「何々ちゃんは何々と呼ぶのは駄目だ」なんて言ったらすごく変になるでしょうからどうする？って言ったら、やっぱりお互いに変なあだ名では言わないとか、あだ名で呼ぶときは注意しましょうみたいな、そういうのを全体で言えばいいんじゃないんですか、みたいなことを言う子もいるので、そういうふうに先生に言ってみようかとかですね。その辺はやっぱり子供たちと話し合いながらですね。ありがとうございます。

○教育長

他にはありますか。

○委員

共感することばかりです。私も、自分なりに背景を考えた場合に、一番疑問に思っていたのは、現在社会のゆとりがなくてストレス社会であったり、忍耐力不足とか、あと自然の体験不足とか、そういうものも影響しているのかなと。つまり事理解決の場が少なくなっているのではないかと私は思っています。そうした場合にやっぱり改善策ってどういうのを考えるべきかと思ったときに、やっぱり環境を変える。信頼関係づくり、築けるけるための環境づくりっていうのは、まず必要な学校環境とか社会環境、家庭環境があると思うので、

相互に連携していないといけないと思っています。あとチームで関わる。スクールカウンセラーも含めて、この子にどういうふうにチームで関わって対策を講じるのか、つまりそれぞれの役割分担がきちんとされて、目標がなければいけないと思っています。あと自己表現もできる場を意図的に設定してあげることも大切なのかなと思います。学校の場合は特に学習ストレスを減らすことと、個別到達目標を設定して、押し付けない。つまり、自ら学ぶ方向へと持っていくことが必要であると思っています。だから、そういうことを考えた場合に、やっぱり今の子供たちの環境とか、私らのときも、厳しい状況とかで、かわいそうな環境というか、考えることが多くて悩むのではないか。そういう訳では、本当だったら今の社会を変えなくてはいけないと私は思っているのが、私の正直な感想です。

○石川教授

確かにネット社会になって、SNSとかすごく進展しましたよね。そうすると例えば中学生に子供が入って、スマホを持ってクラスLINEとかやって、そうするとクラスLINEは我々の目からは見えないわけですよ。そこで喧嘩してくれてれば見えるんですけども、そこでやりとりされていたら見えなくて。でも本当にその中で傷ついたり、ものすごく気は使ってるんですけどね。傷ついたり、排除的な書き込みがあったり、傷ついたりしてますよね。でも、なかなか見えないし、それがもし24時間続いているとしたら、なんて思いますと、本当に息苦しいような思いがして、でももうこれは元には戻せないですもんね。だから、それを別に憂いたところではしょうがないので。でも便利な面もあったり、意外と子供たちもちゃんと判断したり、気を使いながら使っているというのもあるので、だからこそコミュニケーションとか、自己表現の場とかですね、そういうことは、伝えていかなければいけないことはやっぱりあるなと思うんです。環境とか地域の繋がりとか、地域の遊びとかの中で身についていたことが、少し経験不足で身につかないで、あんまり異年齢とかで遊ばないでしまうこ

ともあると思いますので、こういう時にこういうふうに言った方がいいんだとか、そういうふうに言ったら人は傷つくんだみたいなことは、やっぱりちゃんと伝えたほうがいいなと思うことはあると思うんですね。

なかなか世の中を戻したりすることはできないのでね。やっぱり気がついたものが、伝えるとか、一緒に考えるとかっていうことがやっぱり大事なかなと思って、親御さんの中には本当に、こういうゲームだとか何かがあるからうちの子は生活リズムがすっかり乱れたというか、本当にそうおっしゃいますけどでも、リアルな生活がまた回ってくると、夜中の時間も変わってくるので、その辺事例もありますよね。

○委員

不登校は一人一人パターンが違うし、原因も違うので、個別に対応する以外私もないと思っています。ケースバイケースなんですよ。

○委員

いくつかお聞きしたいことがあります。スクールカウンセラーと教員の全員面接もそうですが、共有が非常に大事だと思いましたが、学校の先生がこれだけ忙しい中で、もう少し具体的に共有の方法とか、少しでも効率的に情報共有を図るにはどうしたらよいか、具体的な方法についてお聞きしたいと思いました。あと、保護者とか教員のカウンセリングもしているのか。最初の方のスライドで、欠席日数でかなり幅がありますよね。私が察したのは、欠席日数によっても原因や対応の仕方がすごく変わってくるのではないかと思うのですが、そのあたりをお聞きしたいです。

○石川教授

まず全員面接の情報共有の仕方ですが、確かに工夫しないといけないです。例えば、15分聞いた面接を、15分かけて教員の方にフィードバックしたのでは、聞く方はそんな時間は取れないんですよ。だから私もスクールカウンセラーの研修でいつも言うんですけど、コンパクトに必要なこと、これだけは先生に

伝えたいと思うことぐらいにして、これは共有したほうが良いということを生徒とも確認して、個人名を書くのは厳しいところがありますが、イニシャルぐらいに、紙にでも書いて先生に見ていただきながら、15分くらい時間ありますか、みたいな感じでやるのが良いのではないかとしています。紙に残るのに差し障りがあるという学校のお考えがあるのであれば難しいですが、とにかく要点をまとめて学校の先生に伝えるということですね。

私自身は、そこの校長先生のお考えでノートっていうのを導入しようとなっていたので、ノートに名前を書いて、それは校長先生が鍵のかかったところで管理するからおっしゃっていたので、私が要点を書いて、校長先生も見て学年の先生も見て、あと担任の先生には、15分ぐらいで口頭で説明しますが、そんなふうにしてやっておりました。それから、学校の状況によって色々なので、絶対この方法がいいんです、とも言えないんですけれども、本当にコンパクトにしてエッセンスを伝える、必ずその日のうちに伝えることが大事かなとは思っておりました。もちろん先生がその日出張されていることもありますけど、なるべく早い時期にポイントを伝えるということですね。あとは、教員や保護者とも面接をしているんですかっておっしゃったんですが、スクールカウンセラーの役目とすると、教員へはコンサルテーション、保護者へは助言、援助となっているんですね。だから、学校の先生方そのものの個人的なお悩みとか、そういうのを毎週定期的に伺うのは、スタイルとしてはやらないことになっています。ただもちろん、児童生徒への関わり方とか、指導のこととか、先生が保護者の方に対応されてるんだけどちょっとご苦労されてる時なんかは、そのお話を伺うことはよくあります。だから教員面接はたくさんあります。あと、保護者面接もたくさんありますので、一応助言、援助っていうのが、国の考え方でありましてけれども、保護者様のご苦労とかお気持ちを伺った上で、でもやっぱり、例えばこんなやり方もあるかもしれないし、こんなふうになさってますか、みたいな具体的なこともお話しする必要があると思いますので、そのと

きに、保護者様が置かれている状況とかあるかもしれませんよね。ちょっと今、介護のことですごく時間がとられていて、私は実はこの子のことでこうなんだとか、或いは朝早く出なければいけないんだとか、色々な状況を伺うことがありますので、そういう意味では、助言援助というくくりの中でお話を聞いたり、面接をしているということです。とはいえ色々お気持ち的なこととか、お悩みのことはお話聞きますので、助言援助だけでそんなにすっきりは割り切れませんけれどもね。

先ほども書きましたけど、保護者の不安とか、子育てに自信を失った気持ちとか、これからどうなってしまうんだらうっていうような不安がすごく強いですよね。それはお子さんが不登校になられて、何でうちの子が今不登校なんだらうという気持ちでおられるわけですから、そこのところは本当に丁寧に伺いながら、ただ伺っただけじゃなくってやっぱり例えばこんなふうにしてみますかとか、そんなところまでお話し、一緒に考えるというところですね。

○委員

ミニマムでひとりの子供とその親と関わるのは、定期的にだとどれぐらいでしょうか。1週間に1回はあったほうが良いのか、数か月に1回でいいのか。最低限どれぐらいの頻度が必要なのかを。と言うのは、結局スクールカウンセラーが何人いなければいけないか。

○石川教授

逆にこちらの地域はスクールカウンセラーというのは、週1回とか2回とか、週1回来たときは何時間とかって枠があるんですか。

○事務局

スクールカウンセラーは大体各学校で、平均すると月1くらいです。4校を1人で担当していて、週1勤務ということになるので、大体4週間に1回ぐらいのペースでご勤務いただいて、1日7時間勤務という形になっているのが、つくば市では一般的です。

○石川教授

そうすると月1回ぐらいで1校に行ったときは7時間ってことですね。だからそういう、やっぱりご質問になるわけですよ。例えば、毎週7時間同じ学校に私という人間が行っていますと言えば、そこでかなり幅は選べます。つまりこのお母さんはお子さんが不登校になり始めて、本当にご苦労されているので、ここはもう毎週毎週少し集中的に、40分ぐらいずつ会いましょうというふうにして、これまでのご苦労とか、今お子さんが家で言っていることとか、あと学校の先生と調整しなきゃいけないこととかを集中的に、少なくとも毎週やりましょうと言って1か月から1か月半くらいやって、大分状況が見えてきたり、お子さんが少しペースをゆるめて、ようやく休み始めたのだから家に居たいんだ、というのがわかるわけですけど、その時には、「お母様、2週間に1回にしましょうか。でもお母さんの仕事が忙しければ、じゃあ電話にしましょうか」とか、そういうふうを選んでいったりとかするんですけども、ただ、今、それは毎週スクールカウンセラーが行っている場合なので、月1回となると、そこで何人会えるのかってこともありますよね。だから、実際には会えないで、先生方へのコンサルテーションで終わるってこともあるわけですかね。こういう生徒さんがいて、こういうふうになっているんですけど、という学校の先生の話だけ聞いて対応が終わる、そんな感じでしょうか。

○事務局

1日7時間勤務なので大体、カウンセラーの先生方は6コマ時間を入れてくれます。その中でカウンセリングを入れて、最大で1日6人の方をカウンセリングしていただいて、最後の7時間目のところで、教員との共有というような時間を取るカウンセラーの先生が多かったです。

○石川教授

そうするとある程度1か月先の予約は決まっている感じなのですね。そうすると、突発的にご相談が入っても受けにくいところがありますよね。

○教育長

学校によって相談件数が違うところはあるけども、それによって行く場所を変えるというのは非常に難しいので、学校ごとに配置するしかない。あるカウンセラーはすごく忙しいけど、あるカウンセラーはそんなに忙しくないこともできてしまうね。

○石川教授

忙しくないカウンセラーは、その学校が非常に安定していたりとか。

○教育長

そうとも言えないんだよね。安定してるのかな、相談があってもいいんじゃないかな。だけど少ないのは何でかなとか、いろいろ考えるんですけどね。保護者の方とかもカウンセリングの効果というか、カウンセリングの必要性みたいなものをすごく感じている保護者が多い学校とか、問題はあるんだけどカウンセリングを求めないというのはあるんですかね。多少の差はあるでしょうけど。

○委員

スクールカウンセラーについては、どうも共通理解ができていない。どういう仕事をするのか、カウンセラーの専門性が今ひとつ理解できていないと思うんですね。学校の先生方も、もしかしたらあんまり理解できていなかったり、一般的に市民も、あまり理解してないかもしれないですね。そうするとやっぱり、カウンセラーに過大に期待したり、カウンセラーに会えば治るみたいなに思ってしまう人がいたり、色々だと思うんですよ。なので、今日のお話で、どちらかというとなんか認知行動療法とかそういう、どちらかと言うと行動療法的なことがその後に来たけど、やっぱりカウンセラーの仕事って、その前段階の技術だと思うんですよ。どういう問題なのかが見えてくれば、自分で問題解決したり、これは環境の問題だから先生につなげないと絶対駄目だとか、色々あると思うんですね。もっと先に行くとトリアージになってくると思うんですけど、

やっぱりカウンセラーの専門性、その技術というのをもうちょっと特化して、みんなが分かった方がいいかと思うんですね。

そういう意味では保護者への周知がもう少し必要かなと。だから、何でもカウンセラーにつなげばという意識とか、あと、カウンセリングマインドという言葉も、私ちょっと危険な言葉だと思ってて、何か分かったようなつもりになるけれど、もうちょっとカウンセリング技術的なことに立ち入って欲しいなと思うんですね。

○委員

私が勤務していたときには、スクールカウンセラーさんにカウンセラー対応率を出してもらったんですよ。作ってもらって、保護者に配って、だから、こういうことをやるんだとかこの情報を提供したのですが、そうするとやっぱり相談が増えますよね。だから悩んでいる時には相談に来てくれる。うちの学区の小学校にも伝えて、そうすると小学校からの保護者も、相談に中学校に来てくれたケースが結構ありましたね。

○教育長

そういう意味では、私たちがどれぐらい周知徹底しているのか、もうちょっと注意深くやる必要があるのかなと、この前データを見ながら感じました。

○石川教授

例えばこのアセスメントなんていうのは、これはカウンセラーが得意な分野なので、今日はそこまでお示ししなかったんですけど、例えばある不登校の子供がいたとして、その子が何を言っていて、体はどうで、学校の先生との関係はどうで、親との関係はどうでとか、そういうのを表すことができるんですよ。そして今このことだけど、聞いていくと、学級であるとか部活であるの時からかわれたことがどうしてもこの子は許せないらしいと。でも、なかなかそれは言っていないけども、でも前後関係とか、そのことで保健室で泣いていたことがあったと。嫌なことを言う例えば男子がいると言ってたとか、そうい

うことが見えてくると、やっぱりここなんじゃないかなと仮説を立てるわけですね。「そこちょっと先生聞いてみてください、部活の子たちに。あの子は今言っていないし、例えば男子はうるさいみたいな言い方をしているんだけど、そこでやっぱり何かあったみたいだから、そこ聞いてください」とか、そういうふうにしてアセスメントをしていくときに、カウンセラーの力ってものすごく必要だと思ってるんですね。そうじゃなかったら学校にいる意味がないという言い過ぎですけども、そこをきちっとやっていって、もしかしたら違うこともあるかもしれないので、仮説だけで対応を考えるのは良くないんですけども。でも、そうかもしれない。でも学校の先生が見ている彼女像はこういうことがあると。そうなる、じゃあ、今はちょっとやっとならんだから、そっとならしてやりたいところもあるけども、どうも聞いていると勉強のことが気になりだしたと。その子が例えば中学だとしたら私は高校に行けるだろうか、みたいなことを心配するみたいなことがだんだん聞こえてくると、じゃあどこで学習支援するか、放課後か或いはその学習、教育支援センターなのかとか、そういうことが見えてきますよね。

そのところがすごく大事だと思ってるんですね。だからスクールカウンセラーの役目って児童生徒のカウンセリングと、教職員のコンサルテーションと保護者への助言援助と、校長先生が認める仕事として、予防的なことが入ることもあるし、校長先生が認めれば、先生方と一緒に家庭訪問とかしてもいいとなっているわけですけど。だから、こういうアセスメントをして、学校の先生たちとケースワークというか、その子の対応、計画を立ててやってる方がいると思うんですよね。そういうのを共有していかないと、もしかしたら、あの人は話だけ聞いてくれるけどあんまり具体的なこともないし、学校の先生たちが話しててもあんまり、この子にこういうことしたらいいですかね、というところまでいかないことがあると、そこにはあまり相談が行かなくなることもあるかもしれないです。これは全く私の想像ですけど、そうすれば毎週毎週会えな

くても、「この子にこういうことが起きてるかもしれないので、学校の先生たちここのところとこのところと、それからやっぱり2週間に1回ぐらいお母さんの話を聞いて、こういうことを確認してください」として、また1か月後に子供と会うとか、不登校であるとなかなか会えないかもしれないですけど、保護者に会うとかできると思いますので、スクールカウンセラーが何件会うかも大事なんですけど、そこのところを押さえていきたいところだなと思います。今後共通理解していくってところですね。

○教育長

そこはもう少し深めないといけないと思うんですよね。あとは委員さんの質問ですね。なかなか数を割り出すのは難しい作業なんですけどね。あとは欠席日数の幅という話ですかね。

○石川教授

欠席日数も本当にそうですが、週末になると疲れるんですとか、月曜日はなんとなく気が重いんですと言って、何週か休んで30日なる子もいるわけですよ。そうするとカウントとすると、年間では不登校の1人でしたということになるんですが、常態像とすると、時々休んだりしているけど、ずっと休んでいるわけでもない。となると、ずっと来ない生徒さんや児童さんとは違いますものね。だから、時々来て気分の波なんかもあって、そういう子はもうそれなりのペースがあるかもしれないので、とにかく来たときには、声をかけたり、次の目標とか色々やって、励ましながらやっていくことで、本当は毎日欠席なく来てくれたらいいけど、この子はこの子のペースみたいなこともあると思うんですよね。だけど、ずっと休んでいると、もう連絡することもできないとか、家庭訪問しても会うことができないとか、そうすると、例えば学校の教員の方が、定期的に訪問とかなさってもなかなか会うことができないとかなるともちろん親御さんというのがきっかけにはなりますけども、少しスクールソーシャルワーカーの方とか福祉の力も借りながら、そのご家庭の中で今起きているこ

ととか、どんなアプローチが必要なのかとか、どんな可能性があるのかとか、そういうふうにしていかないと、きっかけが見えないこともありますよね。その辺はどうですか。スクールソーシャルワーカーとか、民生委員の方とか、そういう方たちも地域でお仕事されていらっしゃいますか。

○事務局

スクールソーシャルワーカーですけれども、今年度は、全部で市内45校ありますが、8人ワーカーさんに入っていて、それぞれ必要に応じて家庭訪問をしていただいたり、対応していただいています。それから45校で8人ですので、各学校頻繁に対応するのは難しいので、各学校で民生委員さんとか、地域の方とかの協力いただきながら、例えば、あそこちょっと家庭の方がなかなか家庭訪問できないんだなんて言った場合には、庁舎内の違う部局の方に相談をしながら繋いでもらうこともよくやっています。

○石川教授

先ほどのスクールカウンセラーは何日あれば良いのかという話ですけど、今一応国が目指しているのは、1人1校単独配置で、週1回、年間35日、これを目指してはいるんですね。よく文科省の方ともお話しするんですけども、こちらはまだ週1回じゃない、月1回7時間だと思うんですけど、これは4時間というところも3時間というところもあるんですね。そうすると年間何回か行って、3時間となると、これはもう子供にはなかなか会えないんですね。本当先生方のご苦勞を聞いて、そのやり方がいいんじゃないですか、例えばこんなやり方あるかもしれませんって、それで大体3時間終わると皆さんおっしゃるんですね。だからそういう地域もございますし、ただ、色々な活動を考えたり、子供への面接、親への面接で先生方にコンサルテーションしたり、できればこうやって全員に関わるような対応もするとなるとやっぱり週1回、7時間45分あればいいんですけど、7時間勤務を目指すというふうには出ているんです。国もその3分の1の補助を目指して、今色々してますけど、この間の感じだ

とやっぱり段階的にとかおっしゃっていたので、ちょっと段階的なんだと思う
んですよね。でも、傾斜配置っていうのはありますけど、こちら傾斜配置をや
ってないんですかね。だからやっぱり例えばすごく困難校みたいのがあったら、
そこは少し手厚くしてみて、例えば非常に学級数が少ないとかっていうところ
には、とかそういうのも。でもやっぱり行政的には大変ですからね、そういう
のはね。どういう方向性で今目指されていますか。

○事務局

傾斜配置というところまでいってませんが、つくば市内も、小さい学校か
ら大きい学校あるものですから、子供の数が多い学校には数多くカウンセラー
さんを入れて対応するようにしてはいます。

○教育長

あとは、来年あたりはフリーの人を1人作って、どっかであぶれてしまいそ
うな人が出た場合には、そのフリーの人につなぐようなそういうこともできな
いかなと今考えてはいるんですけども、必ず配置しちゃうんじゃないかと、うん。
それでも十分埋まるかなという、その辺これから考えなくちゃいけないと思う
んですけど、今後、

○石川教授

ちょっと違うかもしれないけど、東京も一応単独校配置なんですよね。です
けれどもシニアスクールカウンセラーというのを、3年前にモデル事業で入れ
て今年から正式な事業になったんですけど、教育事務所みたいなところにその
人がいて、週3日いて、少し課題があるところには行くというふうにしてるん
ですね。でもその人たちはベテランの人なので、何か困った学校があったらそ
のスクールカウンセラーと一緒に考えて、スーパーバイザー的なこと
もするという位置付けなんですけれども、それでシニアってのがついてるん
ですけども。でもそういう意味ではフリーで、緊急支援なんかがあるという方は、
高校だったら高校とか中学に結構集中的に入るんですね。だから確かにフリー

で動けてそして少し集中的にやらなきゃいけない学校には、1週間でも2週間でも行くとかっていうのも、いいかもしれませんね。

○教育長

これから設計したいと思うんですけどね。カウンセラーによる要望というか、察知というのも大事なんですけど、こういうのはどうなのかなと思っているのは、今、1人1台端末があるので、かつ、朝立ち上げた時に体温とか健康状況を入れるのがあるんですけども、それと同じで心の天気を自分で入力するみたいな。今日は晴れです。ちょっと曇りですね。今日は雨ですみたいな、5段階ぐらいのやつを入れて1日スタートすると、先生がそれを一覧できて、なんか曇りが続いているとか雨がちょっと最近あるとか、そういうこともできるんじゃないかなとは思っているんですが、どうでしょうそういうのは。

○石川教授

私去年プロジェクトチームにいたんですけど、一応立ち上がったので今ワーキングにはいないんですけど、やっぱり都立高校で全員で、それはタブレットじゃなくてスマホでやるんですけど、今日のお天気ではないんですけど、気分を入れて、あと、3項目ぐらいは質問項目があるんですね。それに答えてもらって、管理職の先生と、保健の先生と誰かが一覧が見れて、担任の先生は、自分のクラスが見られるというたてつけにして、業者さんが入って全部プログラミングして、それで一応、去年はモデル校でやったんですね。自由記述のところもあって、今悩んでることがあって話したいけど、話せてないみたいな書き込みがあったので、それは個別の対応に繋がったということなので、例えば1,000件あって1件でもいいからその一つが作ればいいという考え方で、そういうのはやり始めてますね。

だから、ただプログラムを作って、パイロット調査して、学校の中でやっぱり合意が図れないとそういうのもちょっと導入できないので、結構そこに1年以上かけて、今年の春から始まっているはずなんですけど夏ぐらいにどうだった

か、何か教えてくれるとまだ報告いただいてないんですけど、そういう取組をやっているとありますよね。

○教育長

今、そういうのが子供たち普通使いになっているので、そんなに苦労はなくできるのかなと思っているんですけど、ちょっと研究してみたいなというものの一つですね。

○石川教授

タブレットは皆さんお持ち帰りなんですか。それとも学校に置いてあるんですか。

○教育長

持ち帰っている学校がほとんどですね。家でもそれでできます。宿題って決めて出しているわけじゃないけど、それで学習するようなこともあります。

時間が大分なくなってきたんですけど、先ほどのQUテストに代わってうちはi-checkっていうのを、東京書籍でやっていますが、これも効果があるのではないかと考えていまして、これもちょっと研究したいと思ってる所です。

先生、これから私たちが不登校支援を考える際に、今悩んでいるところの一つは、外部の学習支援の連携もあるんですねとおっしゃっていただきましたけれども、今後そういう民間フリースクールも含めて、外部の力もお借りしながらやるときに、そういうものと連携する際の留意点。それから、経済的な支援もかなり声が出てきておりまして、そういう外部の方、外部の組織、民間フリースクールを利用する方への支援っていいですかね、そのフリースクールへ支援するのか、個人に支援するのかというのもありますけども、そういうことで先生のお考えとか、実施自治体があつてこういうところの、参考になるんじゃないとか、そういうお話でも結構ですので、いただければありがたいなと。

○石川教授

結構、大変ですよ。もちろんそのフリースクール等に行ったらばそこ出席日数にして認めるとかね、そういうのも、そんなに進んでいなかったんですよ。実は裁量に任せるとなっていたので、裁量に任せるっていうとじゃあ行っても認められない子もいたのかみたいなことなんです。大分今色々な報告書なんか、そこは出席日数として認めるように書いてあるので、そこも進んで良かったと思います。

資金のことは、どうしたらいいのか、もちろんチケットみたいなのができるのか、その査定をどうするのかとかですよ。あとは、中身のところもありますよね。支援内容とか、そういうのはチェックできるんでしょうか。

○教育長

民間フリースクールに訪問をして、内容は見えています。

○石川教授

できれば一緒になって研修するとか、事例報告会や事例検討会みたいな報告を検討して、こういう支援方法が良いのではないとか、そういうことが共有できるとか、そういうのもできたらいいとか、理想的には思うんですけども。どのぐらい交流なさってますか。

○教育長

連携会議ぐらい。

○事務局

連携会議は公設で、つくば市で幾つかありますので、そこの連携会議はやっていますが、民間の方は、こちらの方で担当の方が出かけて行って、どんな様子なのかこの春ちょっと見させていただいたという、正直そこぐらいまでしかまだちょっと進められていないのが実情です。

○石川教授

見させていただいて例えば、どんな意見交換がありましたか。

○事務局

まだその記録に残ってるような感じではないんです。

○委員

教育権に立場を置くか、学習権に重きを置くかで大きく変わってくると思うんですよ。子供の学習権に重きを置けば、やっぱり多様な学びの場を確保するというので、あまりその内容については、公の支配ということもありますのでラインは作りますけど、あまり内容に立ち入ると自由さがなくなると、フリースクールなんか特にそうだと思うんですよ。

私なんかはそう考えると、教育バウチャーの延長で、子供に直接補助をすし、フリースクールは、間接補助の形になると。もちろん、ラインは引かなきゃいけないけれど、あまり教育内容に立ち入るべきではないんじゃないかなと思うんですけどね。だから学校と同じようなプログラム、フリースクールがやるようになったらフリースクールの意味ないですからね。うん。

○石川教授

きっと通う子供たちも、そのいろんな特徴を見てその親御さんもそれでそこを選んでらっしゃるところあるわけですよ。こういう雰囲気がいいとか、そういうことをやっているんだったら、自由でいいとか、

○委員

そうですね。で、もう一歩進むと、ホームエデュケーションとか、ホームスクールの子供は、じゃあもう完全に対象から外していいのか、或いはオンライン支援は認めることができるのかどうか。アウトリーチですよ。文科省の方にもアウトリーチって書いてあるんですけど、これ、どう解釈したりするんですかね。

○石川教授

ホームエデュケーションのことは結構話題になって、文科省の方が結構イギリスとかいろんなところ行かれて、いろいろ情報見て来たり、技術が変わって認めてるんでアメリカの声とかこうやって認めてるんですが、色々な報告があっ

たんですけど、日本はなかなかそこを高校教育として認めるってやっぱり難しい。やっぱりどうやって、そこの査定とか評価するかが難しいということで、どうしてもそこの議論は止まったんですよね。難しいですね、本当に。それでもやっぱり個人への応援っていうのが、選ぶのは個人で、個人へのバックアップというのが、理には適ってる感じがしますよね。

○委員

公平性というんですかね。教育機会確保法。考えるならば、そっちの方向に行くしかないかなと思うんですけどね。

○委員

その子の特性によって関わられる機関がそれぞれにあればよいですが、そこに私は関わられる子は幸せで、全く関われない3割ぐらい文科省で出てますが、その子が一番心配ですね。そういう子がどうしたらいいか。増えていく可能性もありますよね。

○委員

相談すら受けていない子がいる。

○石川教授

オルタナティブで色々な学校ができましたよね。いわゆる高校のサポート校ができて、またさらに、中学でもこういうところに行かれるとか、通信制で、広域でと言って、例えば、N高校とかも今2万人も登録されているところなわけですよね。だから、そういう需要があってこの不登校会議もずっとフリースクールの検討会議と、夜間中学の検討をずっと一緒にやってきて、フリースクールが教育機会確保法というところで一つ落ち着いたところもあって。でもここまで多様性が広がってくるとやっぱり個人への援助ということで、後の先は自由度があるのがまずあれですかねえ。義務教育の間でしょうね、とりあえず。

○教育長

そうするのがいいのかなと自分たちもちょっと今その方向には来ているとこ

ろなんですけど。本当に石川先生には、いろんなご経験それから委員の、ご経験等からたくさんご意見をいただきまして、示唆をいただいたと思います。本当にありがとうございました。では事務局の方で何かありましたらお願いします。

○事務局

本日はご協議お疲れ様でした。次回の会議ですが、8月25日木曜日の午後に開催を予定しております。どうぞよろしくお願いいたします。

○教育長

そのように委員の皆様方、よろしくお願ひしたいと思います。石川先生におかれましては、これからも私たちの方にご助言等いただけましたら、ありがたいと思いますので、何卒よろしくお願ひいたします。先生のますますのご発展を祈念して、この会を終わりにしたいと思います。今日は、第6回の不登校支援検討会議、本当にありがとうございました。お疲れ様でした。